

Socially Engaged Art

社会を動かすアートの新潮流

2017/3/2 [Thu.] 19:00-21:30

「精神と創造性の挑戦：オランダ フィフス・シーズンの取り組み」

登壇者：エスター・フォセン、ウィルコ・タウネブライヤー、岡田聡、石井瑞穂

“Activities of the Fifth Season: Artist in Residence Program in Psychiatric Institution”

Speakers: Esther Vossen, Wilco Tuinebreijer, Satoshi Okada, Mizuho Ishii

会場 Arts Chiyoda 3331 (1階 コミュニティスペース)

定員 50名 (先着順 事前申し込み不要) ※通訳付き

参加費 500円 (メインギャラリーの展覧会を鑑賞される方は、入場券が必要です)



エスター・フォセン
Esther Vossen



ウィルコ・タウネブライヤー
Wilco Tuinebreijer



岡田 聡
Satoshi Okada



石井瑞穂
Mizuho Ishii

フィフス・シーズンは、精神科医療施設「アルトレヒト」の広大な敷地内に、アーティストのスタジオ・ハウスを持つアーティスト・イン・レジデンス (AIR) プログラム。精神医療と社会の間のギャップを埋めることを目的に1998年設立され、これまでに100人以上が滞在した。特別な環境の中で、アーティストは1シーズン(3か月)滞り、患者やスタッフとも交流し、作品を制作する。2015年、オランダ医療界の権威ある「エリザベス・ヴァン・シュトリンゲン賞」を受賞。

トークセッションでは、フィフス・シーズンのディレクターでありキュレーションの責任者であるフォセン氏が、プログラムの特色とその目的を語る。また、姉妹プロジェクトとして2014年、ニューヨークの精神病院で開始した「ビューティフル・ディストレス」の設立者タウネブライヤー氏により、このAIRの展望、精神疾患と芸術の関係性について語って頂く。

日本からは長年精神科医として、精神疾患と向き合いつつ、アートコレクターとして芸術と密接な関わりを築いてこられた岡田氏と、日本のAIRプログラムを代表する茨城県守谷市のARCUS Projectの石井氏に登壇頂く。「精神」と「アート」を軸として、オランダ対日本という視点でなく、4者の経験とそれぞれの視点から本テーマを深めていく。

エスター・フォセン | Esther Vossen

フィフス・シーズン ディレクター／キュレーター。オランダ・コーポレートアート協会 (VBCN) の理事およびモンドリアン財団の委員を務める。ジャーナリズムを学び、オランダ国立放送 (VPRO) の番組制作者として働く。その後、アート・アカデミーとアムステルダム大学で美術史を学ぶ。1998年以来、アベル・アーツ・センター、オランダ国立博物館の精神医学部門、Dolhuys 博物館などの美術機関においてプロジェクトマネージャーおよびキュレーターとして働く。

ウィルコ・タウネブライヤー | Wilco Tuinebreijer

ビューティフル・ディストレス設立者 & 理事長 / 精神科医。アムステルダム市公共健康局メンタルヘルス部にて医療長として従事する。

岡田 聡 | Satoshi Okada

Villa Magical2014 代表 / 精神科医。1958年富山県生まれ。精神科医を本業としながら、30代の頃より日本の若手作家を中心に現代美術作品のコレクションをはじめ。展覧会へのコレクションの出品のほか、自ら展覧会の企画などもこなす。またアートバー (TRAUMARIS) やギャラリー (MAGIC ROOM?、magical、ARTROOM) の運営、Ustream でのアート番組の配信や自ら参加するアートパフォーマンス集団「どくろ興業」での活動を経て、近年は湘南 Villa Magical2014 を拠点に活動。

石井瑞穂 | Mizuho Ishii

アークスプロジェクト コーディネーター。千葉県生まれ。2002年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程デザイン専攻修了。03-04年ポーラ美術振興財団在外研修員として東南アジア各国のオルタナティブスペースを調査。07-08年、アーティスト主導のAIRを運営。アークスプロジェクトでは在学中よりボランティアとして携わり、12年よりコーディネーターとしてレジデンスプログラムや地域プログラムの企画運営を務める。現在は主にアーカイブ事業を担当。